帯大人文社会科学論集，8－2(1990)

Erskine Caldwell文学の多様性

伏見　茂

（帯広畜産大学英米文学研究室）

1990年10月31日受理

Diversity in Erskine Caldwell's fictions

Shigeru FUSHIMI

1

Erskine Caldwellは人間生活の見聞経験においては稀な作家の1人であり，人間が望むこと，望んでいると考えていることの両面を作品の上で満足させようとした作家である。彼は変った場所に足を運んだ経験から，Virginia大学で学んだ理論としての社会学を，生きた実践として作品に応用した。しかし彼は社会学について知る以前から旅行を始め，放浪者として記事を取材していることは衆知の事実である。少年・青年時代を通じて6つの南部諸州に移り住んだが，この間観察者と芸術家の気持を失なわなかったようである。つまり彼の内部には何物かがあって，常にそれを文学として表現させたいと願っていたことを意味する。従ってまずVirginia大学で学んだ理論としての社会学を足で歩いて研究する社会学者でありたいと願った。

彼の作品の多くは，ある場所からある場所に移動するバスとか列車での旅行中に執筆したことを知れば，この点肯づけるし，彼の生活上におけるこの観察者としての情熱こそが，多くの作品の成果を可能にしたと言える。しかし彼の作品は彼の住んだ土地，彼の放浪した土地から生まれたことは事実であっても，

これらを素材として言葉で生活を抽象化し，しかも錯綜した事件の中に重要な意義を見出そうとしたことも事実なのである。

こう見てくると，見たままを描こうとする社会学者としての眼の他に，非現実的な錯綜した事件を創造することによって，作品の扇情性を意図的に指向したとも考えられる。この意味でCaldwellの作品技法には，不可解な衝動が絶えずつきまとっていたとも言えるのではないか。正確に記録され，統計学的に説明されるという完全な経験が社会学であるとすれば，彼はこの段階では満足出来なかったのであり，この経験に彼の想像をふくらませ，事実以上に内的心理を抽き出させる手法に腐心していたと考えられる。

事実,「あなたの作品の主人公は実在の人間か」との読者の質問に対して,「いや彼等は実在の人間にみせかけた仮想の人間達だ。私は主人公達をでっち上げようと努めている。」(1)

以上の言葉は彼の創作過程の錯綜した気持を語っているが，見たままをジャーナリスティックに暴露することの出来ない彼自身の才能を認めた言葉として重要であろう。

以上概観したように，見たものを見たままに描こうとする社会学者としての眼を持ち合わせていながら，反面それを作品に定着させようとする時の錯綜した多様性にも注目しなければならない。従って，この小論では,作者Caldwellの社会学者的なデータ収集の姿勢をまず考察し，その後でデータを作品の中でどのように展開させているかを検討しなければならない。

2

Caldwellの作品について一般に言えることは，その対象が大恐慌に苦しむ農民の姿であるということである。それが社会的意識の強いものでないにしても，その殺伐とした場面から受け取れる感じは，労働者特に農民達への同情とその上に立った農民達の暴露的描写であると言っていい。

「あなたは貧乏人のことをとても沢山書いている。なぜ人生の愉快な面を書かないのか」との質問に対して,「人生の愉しい面を喜ぶ以上に，不愉快なこと

を耐え忍んでいることの方が多いのだ。こうした社会状勢がなくなれば，貧困に取材した小説を書く目的もも早やなくなろうと感じている。」(2)

以上の言葉からだけでは彼の社会性や暴露性を決定し難いが，読者にこうした質問をもち出される程，農民に取材した作品が多いということである。複雑な社会現象を考えると，何も農民の貧困だけがそのすべてではないところに，彼の特異性が感じられる。

一般に大恐慌時代における文学傾向は，ドキュメンタリーな暴露文学だと言われ，Sinclair Lewis，H.L.Mencken，John Dos Passos，Upton Sinclairなどは，広く大衆に向って毒舌をはいた顕著な作家達であって，一方大衆の方はこうした文学に騒然となって直接的な影響を受けたと言われる。特に悪徳ブロカー，銀行家などが攻撃の矢面に立ったが，こうした渦中にあってCaldwellは元来の放浪癖から，南部やアメリカ全土にわたって旅行し，果てにはソビエトやヨーロッパの地を踏み，そこから得た素材に基づいて作品を書き続けた。

1939年に企画された*American Folkway*というシリーズ物の目的は，興味本位の小説とは違って，アメリカの土着民とその子孫に与えた文学的影響を記すことであり，またある地方の生活が他の地方の生活の仕方と違っている点についてリポートすることが主な目的であった。*American Folkway*が企画され実行されたこと自体，彼の実地見聞を立証するものであり，またドキュメンタリーなものに如何に関心をもっていたかが分る。

「私は現実に生活し，動き，語っているその姿を，また私の知っている人々を描きたかった」(3)と1922年頃を述懐しているところは，彼の小説基盤を知る上で興味深い。彼は幼少の頃から放浪癖があって，Georgia一帯を旅行した。1919年の初夏にはある地方の医者と一緒に自動車旅行に出かけ，農民が如何に生活しているかを興味深く観察した。同年の晩夏にはある税金査定員と田舎を廻ったり，父と一緒に山岳地方の教会所属者を訪れたりした。

「小作農の綿花栽培地方では，生活に一様の型があるように思われた。以前タバコは豊富に生産されていたが，今では名残りとしてタバコ道路が横たえているだけだった。大抵の地主はウィネスボロやロイスヴィルやウレンといった

近くの町で比較的裕福に生活していたのに対して，山岳地方では何処を見ても貧困で，貧困の程度は一目瞭然であった」(4) と当時の感想をもらし，次の父の言葉は彼の心に鮮明に焼ついているようであった。

「貧乏な奴は生きている限り，あの小屋から出る機会がないし，決った穴の中でひき蛙のように貧困に暮すことになる。人間があのように生活しなければならないなんて不名誉だよ。またここに住む子供達も大人になったらどうなるのだろう。あいつ等も同じように決まった穴で暮すひき蛙なのか。」(5)

上の父の言葉は少年Erskineの胸を痛めたことは事実であって，Georgiaで幼少時代を過した彼にとっては，この言葉は他人事でない痛憤の思いを馳り立たに違いない。彼の代表作と目される*Tobacco Road*は，以上のような心情的背景の上に成り立っていることは事実であり，次の言葉はそのことを如実に物語っている。

「たとえ私がウレンやジェファスン・カウンティから長い間離れていたとしても，東ジョージアの砂丘やタバコ道路に生活している土地なしの貧困な家族について書くまでは，別な土地に住む人について旨く書けないと思った。私が書評家として読んだ今迄の作品は，実際の生活とは余りにもかけ離れたものでさえあると思われたし，それは現実というよりは創り上げられた環境であり，人為的な事件でしかないように思われた。人間が実際に営んでいるその生活実態の中で，私の知り得た人々についての作品を書きたかった。また作風とか伝統的プロットを無視して描写したかった。」(6)

こうした決意をもってGeorgiaに戻って行く。彼は両親の住むWllenに帰り，ここで実際に小作農の飢，病い，衣類の欠乏を目の当りにして，不愉快と同時に同情を禁じ得なかったが故に，ドキュメンタリー風な作品を書き上げることに強い衝動を感じるのは当然であったろう。

「私はマクス・パーキンの言葉を思い出す。国民の経済生活は健全なものでなく，当分良くならないだろう。東ジョージアの小作農民の経済生活は長い間不健全なものであった」(7) と述べ，彼は毎日山岳地方に出かけ，そこで見たものに深く刺激された。子供達の飢，病人，何物かを求て野畑に出る老人，こ

のような現実を目の当りにして耐えられない気持になったと告白している。

1932年5月始めに完成した有名な小説*God's Little Acre*は，前作*Tobacco Road*の生々しい記録に基づいて，南部の別な土地に住む人々の生活を書くことによって，彼の経験を再整理しようとした最初の長篇であった。この作品はMill町での見聞をもとに描かれたもので，「*God's Little Acre*は私の意識の表面に余りにも鮮明であったし，その登場人物達は私の心に余りにも密接していたので，出来上った作品は成功するだろうと確信をもっていた。だから最後のページが仕上るまで，前に書いた原稿に目を通すことなどしなかった」(8)と述べている。この作品の執筆には相当苦労したらしく，そのためにも出来上ってからの喜びは言語に絶したと述べ，次のように述懐している。

「*God's Little Acre*の最後のページ，最後のパラグラフ，最後の一文，最後の語を書くのは，書き始めてから持ち続けた経験の中で最も満足のいくものであった。私は*Tobacco Road*を書き終えた時の喜び以上に，今書き終えた仕事により喜びを感じた。これは広範な舞台をとり，南部ミル町に住む人々の生活態度と，農場に住む家族の毎日の姿を1つのストーリーにまとめたものであった。」(9)

舞台こそ違え*Tobacco Road*の執筆態度と全く同じであり，ドキュメンタリーな要素がこの作品の場合にも重要な背景となっている。1934年5月のなかば完成した*Journeyman*もこの例にもれるものではない。「本を書くという仕事には，決った住いを必要とするものではないように思われた」(10)と言っているところから，彼がこれまでに転々と移り歩いた結果から*Journeyman*も生まれている。この作品は悪徳牧師の主人公と彼の口実に唆される善良な農民との関係を描いているのだが，この作品について作者は「私はこれとよく似た巡回牧師を，ジョージアとかフロリダ，カロライナなどでよく見かけたし，この小説のよって立つ概念は，長い間私の心の中にくすぶっていたものであった。私は出来るだけ早く仕上げたいと思ったし，一連の長篇小説の中に含めたいと願った南部特有の姿の1つであった。」(11)

ここにもドキュメンタリー性への指向を見ることが出来る。今までCaldwell

の作品に現われた素材は，ドキュメンタリ的背景の上に成り立っていることの実証を試みてきたが，彼の作品が全面的にドキュメンタリーそのものであると決めつけるには余りにも早急過ぎる。確かに彼の小説は，実際に見聞した経験に基づくものであることを認めなければならないが，Upton Sinclairのようなドキュメンタリーな暴露文学とは大きく違っていることを認めざるを得ない。*Tobacco Road*を書くに当って，Georgiaの貧困農民を観察した際，「夕方彼はその日見たことを書きつけたが，貧困，絶望，退廃をそのまま書けなかった。バーク，ジェファスンやリッチモンドの田舎を旅行すればする程，彼の書いたものに満足することは出来なかった。彼には何か宿命づけられた小説があり，それに忠実でなければならなかった」(12)とその錯綜を語っているところから，見たままの姿をジャーナリスティックに暴露することの出来ない彼本来の才能を認めなければならない。現在のアメリカ文学の主流からは脱落はしているが，社会主義的文学主潮が彼の先駆者によって築き上げられている以上，彼の執筆態度だけをみる限り，これと結びつけて考えても差程困難を感じなかっただけに，この言葉のもつ意味は非常に不可解であると同時に興味がある。ある読者の作者に対する質問がこの辺の事情を解く鍵を与えているようである。

「あなたのある小説に登場するある男は，私の叔父のように語り行動する。あなたは事実叔父のことを書いたのか」という質問に対して，Caldwellは「いやそんなことはない。しかし私の仮想的主人公の1人が，実生活の中で見受けられる人間と共通点をもっていることを知っていつも喜んでいる」(13)と答えている。従ってCaldwellの小説の登場人物は，綿密に観察された人間像の上に，読者の注意を喚起させるような属性を作り上げていると言っていいだろう。だから彼の小説は，実際の豊富な経験から得たエキスに衝動的な仮面をかぶせた虚構のリアリティと言える。この意味で，彼と同時代の社会主義文学の系列に属する作家とは区別して考えなければならない。Caldwellにも幾分こうした要素を認めない訳にはいかないが，彼の作品から受け取れる別な要素に比べて，それが希少でしかないという意味である。彼も当時の社会状勢に巻き込まれた，いわばプロレタリア・アートの一員と考えられがちであるが，こ

の考え方は厳密な意味では当を得たものではないように思われる。

「人生それ自身を教師」とするモットーの中で，Caldwellは読者に永続的な印象を与えようとする小説的人間像を絶えず模索していた。この意味での具体的な表われは，伝統的文体やプロットを無視して内容を重視した態度の中にうかがい知ることが出来る。彼に従えば(14)，作品の内容を印象的ならしめるために，自分で見たり人から話された人生の種々相を素材に，それに作者のイメージで実在性のある人間に創り上げた。言葉を代えて言えば，ある話術で創り出した観念的人間像を，実在性のある特性や属性に創り変えたとも言える。だから彼の作品の登場人物は，実在の人間ではなく，実在の人間以上に真実味のある人間のように思われる程手際よく処理された仮想的人間だと言っていい。読者に衝動的な印象を与える点で，彼の仮想的人間像は効果を上げているが，この点に関しては彼の文章についても言えることである。

彼は平易な文章を使うことに最大の努力を払った点，作品のイメージを読者に充分に理解させようとする工夫の1つの表われであるだろう。長い音節の語は極力使わないという基本方針のために，4音節以上の単語を削除した辞書まで作っている。また意味や綴りを辞書で探さなければならないような言葉は使わない程内容に重点をおいていることは(15)，仮想的人間の読者に与える直接的扇状性と相まって効果的である。彼の作品の成立自体極めて複雑であるが，登場人物も多様である点についても，Caldwell文学の特異性を感じさせる。次にこの問題を検討してみたい。

3

1932年から1948年までの16年間を通じて，Caldwellの長篇小説について言えることは，喜劇的要素と悲劇的要素が混入し合い，これが読む者の感情を刺激するということであろう。*Tobacco Road*から*This Very Earth*に至るまで，それぞれの素材は違っていても，その素材の扱い方はほぼ一致していると言っていい。*American Folkway*で言っているように，文明の息のかからない山岳地方の土着民を主題にして文明の波が彼等に与えた影響を書こうとする

以上，彼の作品の主人公はすべて法外な無知によって行動が規制されている。*This Very Earth*のChism，その娘Dorisseの夫Nobby，前者は無知故に引き起す喜劇があり，後者には無知故に起す非情がある。末の息子のJavisが農場に帰りたいと言う時，Chismは彼を狩猟に連れ出し，ウイスキーを強要して酔わせるような男であり，息子の前で黒人の女性に暴行を加えたりする限り，彼はその野蛮な気質の故に喜劇的である。

また国会議員Danielもその例外ではなく，Chismの娘Vickieとの関係からかもし出される彼一流の喜劇も我々の興味をそそるものである。こうした喜劇的要素をぎっしり詰めこんだこの作品も，大詰めに近づくにつれて逆転する。Nobbyは長女のDorisseと結婚してChismの家に同居しているが，この男は怠惰であげくのはてに妻を打ったり，蹴ったり乱暴を働き，昼は殆んど寝ていて夜になると町へ出ていくような男である。こうした夫に妻のDorisseが愛想をつかすのを見て，Nobbyは激怒して妻をアイロンで一撃して殺していまったり，2人の娘も家出をし，祖父はショックで死んでしまう。こうしたパターンはこの作品に限らず，Caldwellの作品全般について言える人間模様なのである。こうした事件の背後には，特権下におかれた南部貧困白人の苦境が鮮やかに描かれており，こうした背景の中で，起り得るあらゆる事件が集約されていると言っていい。我々はCaldwellの作品を読んで笑うことは容易だろうが，少しでも良心があり同情がありさえするならば，手放しで笑っていられない様々な重苦しい事件の累積を見るのである。

次に*Trouble in July*の場合である。保安官のJeffは心理的に鈍感であり，道徳には無関心で，妻の言いなりに行動し，計画された自分の仕事にも怠惰である骨なしの男として描かれている。彼は緊迫した事件に直面しても，従来からの習慣的方法で怠惰に振舞うだけである。つまり白人の娘Katyが黒人の少年Sonnyに犯されたという情報を得ても，釣りに出かけてこの難局から逃れようとする。実はこの事件は事実無根の話で，Katyという娘は変態性の少女で，以前にも黒人男性に挑みかかり血だらけになったことがある。この場合州判事のAllenが法律を強制しなければならないと通告するのだが，Jeffはこの

命令を無視しようとする。リンチ事件を政治的には白にしておこうとするし，自分を危険から遠ざけることに終始し，舞い込む道義的質問に対してすべて目を背け続けるのである。このような行為は，Caldwell作品に共通した喜劇的タイプであり，この例はこれらの中でも典型的な人物として有名だろう。難局から絶えず逃れようとする努力の結果，暗い自分の牢にしのび込み，あたかもリンチされて牢に入れられたと見せかけることになる。結局彼の入った牢は，前から入れられていた顔立のよい混血の女の牢であって，以前からこの娘のことでJeffの妻が嫉妬していた意味のある牢であってみれば，尚更この人物の喜劇性が浮き彫りにされている。しかしこうした喜劇的要素をふんだんに盛り込んだ背後に，暴行を加えたと誤解された黒人少年Sonnyを近所の狂暴な白人達が追い廻し，残酷な手段，つまり少年にリンチを加え，結局少年は木の枝からぶら下がる破目になるし，一方嘘をついた少女Katyも殺されることでこの作品は終るのである。この作品は暴力のもたらす悲劇の作品か，それともJeffで代表される喜劇の作品なのか，理解し難い程両者が融合し合い一体となっている。*Trouble in July*の喜劇性は，暴力を引き起すにたる要素と混入し合って，結果的にはリンチ事件を更に凶悪なものにしていると言える。この意味で，この作品は最も成功したと考えられる*Tobacco Road*よりもむしろ効果的な作品だと思われる。*Trouble in July*は喜劇と暴力のもたらす悲劇とが混然一体となって，それが相互補完の関係にある。

Jeffは喜劇性をふんだんにふり巻きながら，それと同時に暴力による悲劇も並列的に進行させる。この作品を読み始めた時から，彼を典型的な喜劇的人物と予想したと同時に，悲劇も避けられないと予想した。この意味で，この作品は2つの要素が混入し合い効果をあげ，読者に強い刺激をもたらす複合的な作品となっている。この激情的な暴力の招来する衝動は，この作品を暴力小説だと規定させるに充分な資質をもっているが，しかし同時に他の現代アメリカの暴力小説とは異っていることに気付かないでいられない。Caldwellが最もすぐれた状態にある時，今迄触れてきた2つの要素，つまり喜劇的な要素と暴力によって引き起される悲劇的な要素を巧みに処理し，その結果稀にみる力強い

複合的作品を創り上げている。後者について考えるとき，John Steinbeckの作品が直ぐに頭に浮かぶ。Steinbeckの暴力的作品に見られる暴動は，社会的，経済的要因で引き起されるのが常であり，例えば*The Grapes of Wrath*における登場人物は，暴動を起さねばならない必然的な要因のもとに行動する。これは彼等の生活を守るための必然的な暴動であって，彼等の行動の中には社会的，経済的深刻さが常に内包されている。

厳しい闘いではあるが，暴動に成功すれば将来の生活に展望が開かれるとする明るい願いのもとにそれが展開される。これに対してCaldwellの作品の登場人物の暴力は，野蛮な原始的感情に衝動的満足を得ようとする理由だけで引き起される。彼等は一時的な激情の発作によってのみ苦しみ，家を焼き，殺人行為をする。

彼等の激情的気狂沙汰は，彼等の心の狂暴さを抑える以前に，血を流すという行為を通じて満足する。Steinbeckの作品の主人公の中には，精神的不健全さは見当らないのに対して，Caldwellの作品の主人公は退化の過程にある。こうした傾向はCaldwellの全作品について言える程であり，その中心テーマは野性的衝動的主人公の暴力によって引き起される悲劇であると言える。彼の作品における素材は南部に取材したものが多いが，喜劇の中にも，衝動的暴力の中にも，悲劇的要素がふんだんに折り込まれているということである。文明の進展に伴ってその波の影響を受けざるを得ない限り，Caldwellの作品にみられる農民達の退化現象は，むしろ当然のことと考えざるを得ない。リアリズムの台頭によって，過去のロマンティシズムはその姿を変えざるを得なかったことは，南部に限らず一般的な現象として肯けるが，確かに当時の南部は，怠惰な農民，グロテスクな愛，経済上の諸問題によって，批判の対象になったことも事実なのである。こうしたCaldwellの主題選択から，彼を暴力と恐怖の偉大な代弁者とする傾向があるが，この偉大な代弁者が，アメリカにおいてそれ程文学的名声が高くないのはどうした理由によるのだろうか。彼の作品手法における一貫性の欠除が，そうさせているのではないかと思われる。

次に*Tobacco Road*を考えるとき，老いた農夫のJeeterの言動，また上を

向いた鼻孔のもたらすグロテスクな女説教師Bessieの容貌は，喜劇的であるという意味で効果的である。Jeeterはこの作品の主人公で特にLovから蕪の入った袋を盗む時の策略もすぐれており，またBessieの喜劇的容貌と相まって，彼女がJeeterの息子Judeに求婚し新らしい自動車をのり廻すところなど一貫した喜劇性がみられる。しかしこの作品にも悲劇的テーマが基調として存在し，つまり退廃した南部の下層階級の貧困が陰惨な影を落とし，資本主義の進出による貧困農民の悲惨さは強烈である。要するに最後の場面で主人公の家は灰燼に帰し，Jeeterとその妻Adaは死体となって幕を閉じるのはそのことを物語っている。*Tobacco Road*の場合，その状況設定からある程度必然的に悲劇が予想された。

反面*God's Little Acre*の場合はどうだろう。この作品のTyTyとその多淫な娘Jillに求婚するPlutoという男のかもし出す喜劇の後に起る終幕の射殺事件は，余りにも唐突である。Jillが義兄のWillと関係するのだが，これに気付いたRosamond（Willの妻）がWillにピストルを発射する時，窓から裸で逃げ出す一幕があるが，これなどは1つ間違えば悲劇でありながら，どちらかと言えば喜劇的面の勝っている場面であろう。またPlutoなる人物はJillの家を訪れ，その夕方彼女が選挙訪問のために帰らなければならない大事な仕事がありながら，彼女が運転して帰ってこなくても腹を立てない好人物なのである。

Jillがパンクさせた自動車を運転して帰ってきても小言も言わず修理するところなど，非常に粗野ではあるが喜劇的な人物として卓越している。この作品には始めから暗い影はなく，読者に典型的な喜劇作品を予想させながら，大詰に近づいてWillが警官に射殺されたり，長兄のJim Leslieが弟Buckの妻Griselidaに言い寄るとこから激昂したBuckは，兄Jimを射殺したりする。Jimは自分の自動車の前で棒立になり，2発目で白砂の上に倒れるといった描写から，兄を殺したBuckはその良心の苛責に苦しみ，Jimを射った銃で自殺するというシーンに至るまで，悲劇が折り重なって展開される。

「あなたのような精神をもった人のみが，*God's Little Acre*のような作品を書くのだろう。あなたは気が狂っているのか」(16) と読者に思わせる程に連

続的に悲劇が折り重っている。しかし読者に思わせる凶悪な犯罪も，Caldwellにしてみればいとも平凡な事件でしかない訳で，こうした事件はアメリカ南部で数多く目撃された，いわば日常茶飯の出来事でしかなかったからである。

「短篇小説とか長篇小説なりの私なりの定義は，次のようになる。それはある1つの意味をもった創作物であり，読者の注意を喚起させるに足る興味がなければならないし，また読者の心に長続きのする印象を残すに充分な深みがなければならないということである」(17)と作者は述べているが，この文学理論を具体的に実践したのが，喜劇と悲劇の多様性の融合であったろう。興味のある両極を作品に登場させ，印象的ならしめるというのだろうが，必然性のない両極を早急に統合することは，かえってマイナスの効果を助長するのではないか。しかし*Trouble in July*での多様性は，前半から喜劇と暴力による悲劇を予想させている点，異質の矛盾がかえって効果をあげているのは事実である。こうした効果的な作品がある以上，彼の文学手法についての批判は避けるべきなのかもしれないが，1部の作品を除いた他の多くの作品には，その構成上の欠点が多く見られるだろう。

「書くことを学ぶに当って，最も重要な段階は何か」という読者の質問に対して，彼は次のように答えている。「まず言葉と用法を学びなさい。次に望ましい考えを伝えるための文章を，どう組み立てるかを学びなさい。第3に作品を書き始める前に，語るべき素材を持ちなさい。第4に読者の心に消えることのない印象を与えるために，作品のエモーショナルな力を，どのように処理したらよいか学びなさい。」(18)

以上の3つ目までの段階は，どの書き手においても重点項目となろう。しかしエモーショナルな力の処理こそCaldwellの最大関心事であってみれば，読者を強烈に意識している点，ある意味では打算的な計算のもとに打ち出された理論とも受け取れる。また彼の作品が彼自身満足のいくものであれば充分であったことを知っている限り，彼の作品構成上の理論はそれ程客観性のあるものではなかったし，むしろ彼自身作家として成功を目論んだが故の世俗的な理論にすぎなかったように思われてならない。従って彼の文学理論は，登場人物に

扇状的な衝動を折り込み，読者の眼をくらまそうとした多様性の技巧であったと言える。ここに作者の特異性があると同時に欠点もある。だから彼の作品の多様性には，一貫した因果関係があり得ないし，この意味で不満をもつ読者も多いのだろう。彼のアメリカでの名声は決して高くないようだが，こうした理由によるものではなかろうか。

4

今迄見てきたように，Caldwellの作品には一様でない要素と意味があることを知る限り，彼の文学を1つの範ちゅうに限定しようとすることは極めて困難である。それぞれの作品をとってみても，それがどの範ちゅうに属する文学なのか決定出来ない程複雑であるということである。社会的意味をもち，しかも*American Folkway*的見聞に基づいたドキュメンタリー風な作品を予想して読み進むと，登場人物の言動がグロテスクである限り，その予想が完全に裏切られてしまう。喜劇的または悲劇的作品だと予想して読むと，それぞれ逆転の浮目を味わざるを得ないのである。こう見てくると，Caldwellは相矛盾する意味の多様性に腐心していたことが分るのだが，それにはそれなりの理由があったはずである。「もし私の書く仕事で生活が出来なければ，私のすべての時間を書く時間に捧げることは出来ないであろう」(19) という言葉を聞けば，彼の文学手法も基本的には彼の生活に関わりがあったと理解される。つまり多様性に対する基本的な意味のあり様は，読者の心に消えることのない印象を与えることによって，多くの読者を勝ち得ようととした彼一流の打算的な技法であったと考えられる。この意味では，彼の特異な技法について否定することは出来ない。むしろ彼のイメージによって塗り変えられたとはいえ，山岳地方の野性的な生活が，文明の進化につれて変貌を余儀なくされたその複雑な生活を，彼一流の文学手法によって，読者の心に印象づけた功績は大きいものがあるだろう。

注

テキストは次のものを使用した。

Tobacco Road(The Modern Lib. , New York, 1931)

God's Little Acre (The Modern Lib. , New York, 1931)

Journeyman (Heinemann, London,1955)

Trouble in July(The New American Lib., New York, 1940)

This Very Earth(The Falcon Pr., London, 1948)

(1) Erskine Caldwell, *Call It Experience* (Hutchinson, London, 1952), Epilogue.

(2) *Ibid.*, p.25.

(3) *Ibid.*, p.35.

(4) *Ibid.*, p.25.

(5) *Ibid.*, p.25.

(6) *Ibid.*, p.101.

(7) *Ibid.*, p.102.

(8) *Ibid.*, p.125.

(9) *Ibid.*, p.130.

(10) *Ibid.*, p.56.

(11) *Ibid.*, p.155.

(12) *Ibid.*, pp.102−103.

(13) *Ibid.*, Epilogue.

(14) *Ibid.*, p.58.

(15) *Ibid.*, Epilogue.

(16) *Ibid.*, Epilogue.

(17) *Ibid.*, p.234.

(18) *Ibid.*, Epilogue.

(19) *Ibid.*, Epilogue.